

# うひはたぶみ (初機踏)

H.A.M.A.木綿庵だより  
第33号  
2019(令和元)年9月26日  
(編集発行 梅田正之 090-5042-7775)

## 大和緋の復元について — 「不可能」の意味するところ —

奈良県立民俗博物館(大和郡山市)では、今年度は毎月第4日曜日に「はたおり実演」が開催されており、先日9月22日に参加させていただきました。その際、「大和緋の復元」を模索されている方とたまたまご一緒になり、大和緋関連の館蔵資料閲覧の事前申請をされていたその方と学芸員の方とのお話の輪の中に、許可を得て加えていただきました。大和緋の復元はもはや「不可能」であるという見解は、そのお話の中で聞かせていただきました。

大和緋は、江戸時代の中期(宝暦年間)に御所の浅田松堂によって創始されたと言われていています。綿作の一大産地であった地の利を活かし、「地元の特産品を単なる素材に止めるのではなく、製織することによってなんらかの付加価値をもった新たな産業を興さんとの志(※)」をもって考案されたようです。松坂木綿に刺激を受けたとされる大和緋は当初は紺緋が主流でしたが、明治期に入り白緋がつくられるようになるとこれが大ヒットし、東の中野緋(群馬県)と並んで全国的に知られるようになりました(本誌第9号参照)。したがって、一般的には「大和緋」と言えば「白緋」を指すように思われがちですが、大和緋には紺緋もあることを忘れてはなりません。

ところで、大和緋の歴史、製法、デザイン等を知る上においては、以下の資料が参考になります。

①『大和もめん』(天理大学附属天理参考館発行、昭和56年1981、資料案内シリーズ20)、②『大和がすり』(奈良県立民俗博物館発行、平成7年1995、平成7年度特別テーマ展図録)、③『大和もめん』(奈良県立民俗博物館発行、平成15年2003、平成15年度特別展図録)、④『大和木綿沿革史』(大和木綿同業組合事務所発行、昭和3年頃?)。※は②20頁参照。

大和緋の復元はなぜ「不可能」なのか。私なりに納得した理由は以下の通りです。

- 1、大和緋を代表する白緋に用いられる緋糸は、「板締め」(いたじめ)で染められる。板締めには、檜で作られた「型板」が用いられるが、型板を作ることのできる職人がもはやいない。
- 2、現存資料の型板は、遺物としての参考品であって、使用はできない。
- 3、個人所有の型板であっても、正しく保存されていなければ使用に耐えない。「正しく保存」とは、木の歪みを防止するため、常に水槽に漬けて保存すること。当時も、大量の型板の保存には大型水槽が必要であり、施設と経費と技を要した。したがって、「正しく保存」されている型板は現存しない。
- 4、仮に型板が用意できたとしても、型板を用いて糸を染める機械と技術の伝承者がいない。
- 5、デザインの再現だけであれば製織技術やプリント技法で可能ではあろうが、それは「大和緋の復元」と言えるのか?
- 6、大和緋は、白緋だけを指すのではない。「大和緋の復元」とは、そもそも何を意味し、何を目的としているのか。まずは「復元」の定義が必要。

技術の伝承と復元、伝統とは何かについて、あらためて考えさせられる貴重なひとときとなりました。



奈良県立民俗博物館所蔵の大和機

----- Monthly Data -----

【天理やまのべ木綿庵】(問い合わせ件数 令和元年8月24日～9月23日)  
東京都1、奈良県1

【H.A.M.A.木綿庵】(令和元年8月24日～9月23日)

メールを含む各種相談件数7、綿畑や作業場の見学を兼ねた事前申込済来庵者数8件15名



## 《綿の栽培記録 2019》 — 平成31年(令和元年)度版 その8 —

9月中旬を迎えて、綿花の収穫最盛期を迎えています。今年は9月に入ってから台風が近畿地方を直撃することなく、降雨量も少なく、しかも厳しい残暑で、昨年に比べ綿花の質は良質で、豊作です。

洋綿の白の開絮は9月1日に確認、洋綿の茶綿の開絮は9月7日に確認しました。洋綿の緑綿も茶綿と同じ頃に確認。9月8日の白露以降は一斉に綿が吹き始めた感じで、毎日のように収穫とその整理に追われています。9月の降雨量と日照が収穫にいかにか大きな影響を与えるかということを実感しています。

なお、8月10日に開花した花に印を付け、開絮に要する日数を計りました。結果は和綿の白綿(赤木)9月19日(所要日数40日)、同(青木)9月23日(所要日数44日)、洋綿の和綿9月26日(所要日数47日)でした。

写真は左：1号畑和綿の白綿赤木(9月19日)、中：1号畑和綿の白綿青木(9月23日)、右：1号畑の洋綿の白綿(9月26日)



## 〈岡村製油株式会社を訪ねて〉 — 大阪府柏原市 — 令和元年8月28日

(株)岡村製油は明治25年(1892)創業の、日本で唯一の綿実油搾油メーカーです。会社周辺はかつての河内木綿の一大産地でもありました。今回の訪問は、以前、会社役員の方が木綿庵の畑を見学に立ち寄って下さったご縁で実現。当日は、油糧部長様が直々に綿花から綿実油を絞り、精製する過程を詳しく説明して下さい、工場内を隈無く案内して下さいました。綿花および綿種の秘めたパワーと可能性に圧倒されるとともに、かつては天理市内でも水車を用いて綿種を叩(はた)いていた意味を理解することができました。

写真下段左：綿種を叩(はた)く工程での産物、中：搾油工程での産物、右：搾油精製工場内の様子

### 【綿の加工の作業記録】 (梅田 1人の作業量)

・糸車を用いての糸紡ぎ量 (和綿：平成29年, 2017産。丹羽正行氏による打ち綿)

8月24日～9月23日 (作業実日数13日) 糸の総量40.5g (10.8匁) 総時間114分 (1時間54分)

※1分間≒0.355g 1時間≒21.3g (5.7匁)

### 【研修等の記録】

- ・令和元年08月20日 奈良県「子ども・若者支援機関研修」令和元年度第2回参加(奈良県庁)
- ・令和元年08月27日 奈良県「子ども・若者支援機関研修」令和元年度第3回参加(奈良県庁)
- ・令和元年08月28日「岡村製油株式会社」(大阪府柏原市)訪問、見学。日本で唯一の綿実油搾油会社。
- ・令和元年09月02日「相楽木綿伝承館：機織り教室-専科」(京都府相楽郡精華町)受講。作品設計。
- ・令和元年09月02日「奈良県立民俗博物館」(奈良県大和郡山市)見学。
- ・令和元年09月03日 奈良県「子ども・若者支援機関研修」令和元年度第4回参加(奈良県庁)
- ・令和元年09月15日「相楽木綿伝承館：機織り教室-専科」(京都府相楽郡精華町)受講。緋糸括り。
- ・令和元年09月22日「奈良県立民俗博物館」(奈良県大和郡山市)見学。資料閲覧、機織り体験教室参加。

